# 無愛想な彼

倖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無愛想な彼

【Ｎコード】
Ｎ５４５６Ａ

【作者名】
倖

【あらすじ】
ある日友達に教科書を借りに行こうと廊下を走っていたら、滑って転んでしまった私。それをきっかけに間宮兄弟と知り合ったけど…

# 第1話

義務教育を終え、ある程度自由を許される高校生活。恋に部活に遊びに、（少しだけ）勉強に毎日大忙し。
そんな高校の生活を送るなか学年には必ず一人いる、“無愛想な男子生徒”。
私の学校にも例外はなくてやっぱりいる、無愛想どころか“超無愛想”な男子生徒“間宮くん”。ついてることに、私と噂に聞く彼とはクラスは離れてて、高校2年になった今まで一度も顔を合わせたことがない。友達で彼と顔を合わせた事がある子がいるけど、

「いっつも無表情で、何考えてるかわかんない」

らしい。なかには、

「プリントを渡そうとしたら、睨まれた」

って子もいる。
そんな評判ばかりきいてるせいか、その男子生徒“間宮くん”のイメージは私のなかでは最悪のものとなっていた。

そんなある日の事。別のクラスの友達に教科書を借りに行こうと、普段はあまり通らない廊下を走ってた。たまたまクラスの離れた友達に借りに行こうとしたから、その時は知らなかったんだ、廊下に異変があったことを。

早く教科書借りて教室に戻らないとチャイムがなってしまう。私は慌てて廊下を走っていた。私の走っている直線上は避けているのか

何故か誰もいない。チャンスとばかりに全力で走る。

「あの子危ないよ〜」

なんて声が聞こえた気がするけど、今はそんなことは気にしてられない。

友達のクラスまで残り数メートル、チャイムまで残り5分。

『ちょと急げばイケる！！』

そう思いスピードをあげようとした瞬間、私の視界は回転――そして……《後編へ続く》

## 第2話

背中にちょっとだけ固い感触と暖かさを感じ、私は自分がどうなったのか確かめる為に目をゆっくりあけた。

最初に目にはいったのは、学ランの金色のボタン。

『男の子…？』

目を上にやると窓から差し込む日差しで、髪の毛が透き通っていてミルクティーのような色をしていた。

「…大丈夫？」

男の子が口を開いた。私はぽけっと男の子の髪の毛を見ていた。「ここ、ワックス塗りたてで滑りやすいんだよ」

だから私の走っていた所は誰も通らなかったのか…。

男の子がワックスで滑った私を支えてくれたらしい。

『優しい人だなぁ…』

男の子の手を借りながら私は立ち上がる。時計は残り1分を示している。

「あっ…教科書……」

でも友達に借りてる暇はない。

「君、何組？」

「にっ…2組」

「次は歴史かな？友達がさっきいってたんだ。時間がないなら、俺今持ってるから貸すよ」

そういって教科書を渡してくれた。

「ほら、急いで！今度は滑らないようにね」

私はありがとうといい走りだす、バイバイと手を振ってくれたその子を一度振り返り私はまた元来た廊下を走り出した。

男の子のお陰で授業にはギリギリセーフ。借りてきた教科書の背表紙をみると、

“間宮智浩”

とかかれていた。

『まみや…？間宮…？？』

間宮ってあの“無愛想な男子生徒間宮くん”！？どこが無愛想なんだ？私の頭にはハテナマークが浮かんだ。無愛想どころかとっても優しい男の子みたいなのに…。

でも開いた教科書は、人物像だけ落書きがしてあった。《第1話終》

## 第3話

“無愛想な？間宮くん”の面白可笑しい落書き教科書を見ていたら、いつの間にか私も落書きをしていた。人の物だとわかっていたけど、更に眉毛の濃い西郷隆盛とか、ハゲじゃないザビエルとか私の悪戯心を擽るには充分だった。

『力作！キラキラおめめの坂本良馬！！』

間宮くんの物なのに力作を生み出してしまった私。幕末の英雄は乙女チックな顔で教科書に収まっている。そうしているうちに、授業は進み終了１０分前になると、今度はその教科書を返しに行かないといけない事実に気がづく。

『間宮くんがすぐに見付かればいいけど…』

私の中ではすっかり無愛想な間宮くん像は消え去っていた。むしろ助けてくれたときの、好青年なイメージの方が勝っている。

休憩は１０分しかない。間宮くんの教えをきちんと覚えていた私は、ワックスされた部分は避けて彼のクラスへと急ぐ。

間宮くんのクラス、７組の入口に来た私はさっき教科書を借りるはずだった友達に声をかけられた。

「あれ？恵じゃん。どうかした？」

「あっ、いいタイミング！間宮くん呼んでくれる？」

「間宮くんを？」

「さっきあんたに教科書を借りようとして走って来たら、ワックスに滑っちゃって。時間がなくなってどうしようって思ってたら、間宮くんが貸してくれたの」

「えっ？」

「だから、間宮くん呼んでくれるかな？」

私は教科書を友達に見せながら、一気に説明した。しかし友達は驚いた顔で私を見る。

「ねぇ…本当に間宮くんに借りたの？」

なんて疑うから、私は持っていた教科書の名前を見せた。

何でそんな反応してるんだろ？

「本当…“間宮智浩”って間宮くんだ」

おかしいなと首を傾げながら、友達は教室に入っていった。

私はなんとなくその姿を目で追う。

「間宮くん？さっき2組の子に教科書貸した？」

そんな声が聞こえてくるが、友達が影になって丁度間宮くんが隠れて姿が見えない。入り口にいるとこの組の子の邪魔になるため、廊下の窓際に移動した。

『間宮くんまだかなぁ～？』

外では体育のクラスがグランドに線を引き、授業の準備をしていた。早くしないと次の授業が始まってしまう。

「……あの」

『次は現国かぁ…。今日は気候もいいし、お昼寝決定だね』

「…もしもし」

誰かに呼ばれた気がして、私は声が聞こえる方へ向く。そこには確かに男の子がいた。
私は女の子にしては背は高い方だけど、相手は見上げないと顔が見えないくらい大きかった。

「はい？何か用ですか？」

間宮くんは私よりちょっと大きい位だったし、何より髪の毛はもっと長めだった。目の前の人はというと長身に黒髪の短髪で、文系を思わす間宮くんとは反対に体育会系な感じ。
あれ？友達は間宮くん呼んでくれなかったのかな？

「…用っていうか、今長谷川に呼ばれたんだけど」

あっ、長谷川って友達の苗字ね。あの子が呼んだって……

「私は“間宮くん”を呼んでもらったんだけど…」

男の子はちょっとムッとした顔をした。…というか、何か怒ってる？？

「俺が“間宮智浩”だけど…」

# 第4話

『えっ！？この子が“間宮智浩”くん？？』

さっきと違う間宮くんの登場に私は驚いた。

「アイツか…」

少しの沈黙の後、彼は口を開いた。私が顔を上げると間宮くんは怒ってるような、ムスッとした顔でいる。私と目が合うと何故か複雑な顔をしてと目をそらした。そして回れ右をすると、クラスに向かって叫んだ。

「幸ぃっ！！」

私をはじめ友達も7組の子みんながビクゥっと肩を揺らし、間宮くんを見た。普通に話しているときは気付かなかったが、彼の声は低めでよくとおる声をしていておそらく廊下にも響いたであろう。

少しだけザワつく教室。間宮くんは普段は大きな声を出さない子なのだろうか？

「なんだよ～智」

そんな教室の中からさっき私が会った“間宮くん”が出てきた。やっぱり綺麗な髪の毛の色をしている。

「なんだよじゃない。お前勝手に俺の教科書貸しただろ？」

紛らわしいので、心の中では智浩くん（教科書の持ち主）と呼ぼう。

智浩くんは少し体をずらして幸くん（私が最初に会った“間宮くん”）に私の姿を見せた。

「あっ、さっきの子だね」

幸くんはにっこり笑って手を振る。そんな仕草にちょっとドキドキしちゃったのは、内緒ね。

「いくら兄弟だからって、人の教科書を貸すなよ…」

「きょ…兄弟！？」

思わず声をあげてしまった。当然幸くんも智浩くんも私を見る。

「そう。僕は間宮幸浩でこいつが、兄貴の間宮智浩…って智の名前は知ってるよね」

私は幸浩と頭の中に名前をインプットさせた。確かに兄弟と言われれば、長身なところや顔のパーツの所々が似ている。

「教科書返しにきてくれたんだね？無愛想で有名な智の変わりにお礼をいうよ。ありがとう」

「いえいえ、元はといえば私が教科書を忘れたのがいけなかったんだし…」

慌てて教科書を幸くんに渡した。やっぱり無愛想な間宮くんは智くんだったんだ…。

『納得…』

智浩くんはというとムスッとした顔でいるだろうなぁ……と思ったら、その場にしゃがんでいた。

「間宮くん？」

智くんはどうしたのか聞こうと幸くんをみると私の好きなにっこり笑顔で

「“智浩”って呼んであげてよ」

という。幸くんも同じ間宮だから智くんが勘違いして、私の問いかけに答えなかった訳じゃないと思うけど…。

「智浩…くん？どうかしたの？」

私が智浩と呼んだら、智くんの肩がビクゥっとした。すると幸くんはポンっと手を叩く。流石兄弟、智くんのこの状態の訳がわかったらしい。

「あ～、智～お前女の子と話てるから照れてるんだ？」

『…そんな事で照れてるの？』

「…照れてない」

『そりゃそうだよね』

「いやいや、照れてるって。この子だから？」

「あり得ないし」

『即答かいっ』

心の中でツッコミをいれた私。いくら無愛想といえども私ごときと話しただけで、照れるわけないっか。ぼちぼち放課が終わる頃だ。

「あっ、そろそろ教室戻らなきゃ！智浩くんも幸浩くんも教科書ありがとうね！」

「どういたしまして！ワックスに注意だよ」

「もう転ばないよ、幸浩くん」

クスクス笑ったら、幸くんも笑い返してくれた。うん、大好きな笑顔！私はなんだかウキウキした気分で、教室へ戻っていった。

## 第４話（後書き）

皆様初めまして、倖です。ここまで読んでいただきありがとうございます。キャラの名前が出てきましたので、紹介します。

主人公　朝比（あさひ）　恵（めぐみ）

間宮（まみや）幸浩（ゆきひろ）

間宮（まみや）智浩（ともひろ）

です。ちょこちょこと更新しようと思いますので、お付き合いよろしくお願いします。

# 第5話

それからギリギリに教室に入った私の頭の中は、さっきの間宮兄弟の事でいっぱいだった。“間宮くん”は二人いて、“教科書を渡してくれた”幸くんのお兄ちゃん智浩くんが“無愛想な間宮くん”で…。

「…なんだか面白そうな二人」

思わず口に出してしまう。隣の席の友達は私の独り言に不思議そうな顔をしている。

『あっ…、そういえば落書きしたまんまだ』

智浩くん怒ってないといいけど…なんてまた独り言いわないように心の中で呟く。
そしてこの落書きにより、私のこれからが変わるとは思ってもいなかった…。

間宮兄弟との一件から数日経ち、彼らとも顔を合わすことなく私は学校に通った。7組は私の教室から離れてるだけあって友達も用がない限りは放課に会いに来なかったし、私も会いに行くことはなかった。
そんなある日の事――。

「めぐ〜っ」

クラスの男の子が私を呼んだ。ちなみにクラスの男の子達も女の子

達も私のことを“めぐ”と呼ぶ。
私達のクラスって、みんな仲が良くてお互い苗字では呼ばない暗黙の了解がある。

「なに〜？」

「珍しく男のお客」

「…珍しいってなんか失礼じゃない？」

「事実じゃん」

クラスメイトはキシシと笑いながら廊下を指指した。ありがとうといって、廊下に出る。男の子のお客さんって誰だろ？

廊下に出た私は目の前の光景にまず驚いた。驚きの次は『何故この人が？』という疑問が浮かび上がった。その人物は噂の通りにムスッとし無愛想っぷりを発揮しつつ、誰も寄せ付けないオーラでそこに立っていた。

記憶から忘れがちになっていた、間宮兄弟のお兄ちゃん“無愛想な間宮”こと間宮智浩くん。クラスの女の子なんて怖くて遠巻きに智浩くんを見ている。

「こっ…こんにちは。どうかした？」

声をかけると、智浩くんはこっちを向いた。ちょっとびびったりして…。

「……」

「智浩くん？」

私を訪ねてきたんだよね…？何か悪い事したかな…？？

「…今日放課後予定は？」

おぉっ！喋った！！何で声が聞こえてくる。

「…俺話せない訳じゃないんだけど…」

智浩くん心なしか声が沈んでます。すみません、私もそう思いました。

「で、予定は？」

「あっ…えぇっと、今日はないよ！」

慌てて返事する。部活に入ってないから、友達と用がなければ放課後はほとんど暇してます。

「じゃあ放課後7組まで来てくれ。じゃあ」

智浩くんは用件だけさっさというと、スタスタ歩いていってしまった。すれ違う女の子達はちょっと避け気味だし…。

呆気にとられていた私はチャイムの音に反応して、やっと動きだした。

席に座ると隣の友達に

「何の用事だったの？」
と聞いてきた。私は
「さぁ？」
と答えるしかなかった。

## 第6話

智浩くんの呼び出しの謎を残したまま、あっという間に放課後になった。呼び出される覚えの全くない私の心臓は、バクバクいいっぱなし。友達曰く、

「何か間宮くんの気に触ることしたんじゃない？」

らしい。だいたい智浩くん達に会ったのも会話したのもこの前の一件の一度きり。

「そういえば、あの時間宮くんに教科書借りたんだよね？」

「そうなんだよね……」

教科書を借りて……、授業中に……開いてみたら……落書きがあって……？？

「あ〝っ！！」

そういえば私智浩くんの教科書に落書きしちゃってそのままだよ！！

「私とんでもないことしちゃったよ～」

友達に落書きの話をしたら、

「それはアンタが悪いわ。頑張りな」

と冷たく送り出されちゃった。

教科書返しに行ったときとは反対に、とぼとぼと7組に向かう。呼び出しを無視するわけにもいかないし、だいたい非はあきらかに私にあるわけで…。

「なんで落書き消さなかったんだろ…」

はぁ～っと盛大にため息をつくと、いつの間にか7組に来ていた。ある意味、職員室に入るより嫌だ。

『智浩くんは無愛想で有名だけど、この前喋った感じではそんなに怖そうじゃなかったし…、でもこの前は怒ってた訳じゃないから怒ったら怖いかもだし…』

考えだして自分に非があると分かると、どんどんマイナスになってくのは人間誰しもあるだろう。私は今まさにその状態。混乱の中で導き出した結論、

『とりあえず謝る、ひたすら謝る』

だった。心臓はバクバク、何だか変な汗もかいてきた。

「……そこで何してるの？」

緊張が最高潮な私のちっちゃい心臓は今ので破裂しただろう。……間違いない。

「お～い、大丈夫かぁ？」

声の主は私の目の前で手をヒラヒラさせる。どこからかスペアの心臓を持ってきて、表情や身体は固まったまま首だけ動かし声の主をみた。

「あ…っ、幸浩くんだ…」

「どうしたの、なんかめちゃくちゃ固まってるよ？」

「あっ…えっ…えっと…」

しどろもどろになりながらも、幸くんに事情を話す。

「……」

もしも～し？幸くん、表情が智浩くんみたいになってきてますよ？

「ゆっ…幸浩くん？」

# 第7話

やっぱり智浩くんと兄弟だけあって遺伝子は同じものを受け継いでるわけだし、顔のパーツが似てるんだから智浩くんと同じように黙り込んじゃったらそれなりに怖いものがある…。
あんなに笑顔の似合う幸くんが無表情に黙り込んだら、私はビビるか驚くか呆然とするかしかない。

「……」

ちっ…沈黙が辛い…。なんで智浩くんだけでなく、幸くんも怒っちゃってるんだ？私知らない間に何かやった？

――ピシャンッ――

音をたてて突然ドアが開いた。ちなみにまだ7組の入口の真ん前です。

「…幸浩？何してんだよここで」

中から出てきたのは私を呼び出した張本人、智浩くん。さっきみたいに機嫌は悪くなさそう…。むしろなんか無愛想なオーラから、柔らかそうな感じになってる。私達がドアの真ん前にいたからか、驚いていた。

「…智浩、お前」

「なんだよ？」

「……」

私は黙っていることしかできない。と…とりあえず、二人に挟まれたままは辛いからこっそり移動しよう。

智浩くんは私と幸くんの顔を見て、

「あぁ…」

と呟く。

「ちょっと幸浩、落ち着けよ」

「あぁ？」

幸くん！？めちゃめちゃキャラかわってますよ。

「俺には怒る理由はなんとなくわかった。だけどこの子がこれじゃ可哀想だろ」

今度は反対に智浩くんが気を遣ってくれた。この前の幸浩くんみたいに優しい。

「だいたい俺らこの子の名前も聞いてないのに、すぐにどうこうする訳ないだろ」

……あっそういえば私、まだ自己紹介してないや。二人には自己紹介してもらったのにね…。

「そういえばそうじゃんね」

あらら？幸くんコロっと機嫌が直ったみたい。この前の幸くんだ。

「あっ、私は朝比恵っていうの。紹介遅れてごめんね」
ペコリと頭を下げる。顔をあげると幸くんはにっこり智浩くんはちょっとだけ笑みを浮かべ、
「「よろしく」」
といった。
話は脱線しちゃったけど、智浩くんの呼び出しって何だろう？首を傾げたら、幸くんが気づいてくれた。
「智が呼び出したんだろ？俺はいくわ。めぐちゃんすごく緊張してたみたいだから、誤解といて優しくしてやれよ。じゃあめぐちゃん、ごゆっくり～」
さっきの不機嫌オーラは何処へやら。幸くんは例の如く手をヒラヒラさせて、廊下を歩いていった。
7組の前には私と智浩くんの二人だけ残っている。廊下には誰もいない。
うぅっ…また緊張してきた…。
「待たせて悪かったな、ここじゃ何だから中に入れよ」
智浩くんに促され教室へと入っていく。
智浩くんの席は窓際の一番後ろらしい。机の上には例の教科書が開いた状態で置いてあった。

## 第7話（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。少しずつではありますが、間宮兄弟の性格が出てきました。彼らはまだまだ掴めない所ありますが、そのうちにはっきりしようと思います。
次回もよろしくお願いします。

## 第8話（前書き）

今回は短いです。

# 第8話

「あっ…」

智浩くんの机の上に広げられた教科書、丁度おめめがキラキラな坂本良馬のページだ…。でも見れば見るほど力作だと思うのは、一種の親バカなのかな。
私が教科書を見ているのに気付いたのか、

「あぁ、これ？恵って意外と面白い事やるんだなぁって思って見てたんだ」

とニヤリと笑う智浩くん。ちょっとーっ、いきなり呼び捨て！？

「…智浩くんこそ意外だよ。落書きなんてしなさそうなのに…」
「無愛想で有名だし？」

まさか智浩くん本人の口からその言葉がてでくるとは思わず、私は勢いよく顔をあげてしまった。
…智浩くんは苦笑していた。

「みんなが俺の事無愛想っていってるのは知ってるよ」

「……」

「幸と違って俺は社交性がないし、口数が少ない方だからよく誤解されるんだ」

でもこの前もそうだけど、いつも不機嫌そうだし…。常に眉間に皺

を寄せてそうだもん。

「ほとんど無意識のうちに皺を寄せてるみたいなんだよ」

「でも今はそんな顔してないよね？」

この前と違って今日は無愛想さとかがない。

「それは恵と二人でいるからだよ。顔見知りの少人数なら割りと平気らしい」

智浩くんの表情が今までで一番柔らかくなった。幸くんとはまた違ってるけど、とっても優しい笑顔…。

「あっ…、ごめん勝手に呼び捨てにした…」

「いいよ。クラスの男の子とかみんな私のこと“めぐ”とかいうから」

好きに呼んでいいよそういおうとしたら、下校を知らせる放送が入った。早くしないと昇降口が閉められてしまう。二人で顔を見合わせ笑うと、下校の準備をする。

智浩くんが呼び出したのかはわからないまま、私達は学校をあとにした。

教室を出る直前、

「…知り合って間もない女の子を、呼び捨てで呼ぶってなんだか特別な感じだな」

そういった智浩くんの顔はちょっと赤くて、家に帰っても忘れられなくなってしまった。

## 第9話

「ねぇねぇ恵！！昨日どうだった？」

朝、教室に入ってくるなり隣の席の友達がいう。私は肘をついて外を見ていた。

「…特に何もなかったよ」

「え～っ？そんなことなかったでしょ？じゃあ何で間宮くんに呼び出されたの」

「…私も知らないよ」

友達はえ～っといって椅子に座る。

「だって本当だもん。ちょっと話してたら下校時間になった」

まあ本題に入るまでが長かったんだけどね。そういえば幸くんが怒っちゃった（？）謎も残ったままだ。

「ねぇ、間宮くん兄弟いるの知ってた？」

「えっ、恵知らなかったの？幸浩くんでしょ？かっこいいし優しいし、女子のなかではかなりの人気者だよ」

…知りませんでしたよ。だいたい7組離れてるじゃん！！

「無愛想で有名なのは智浩くん…だっけ？無愛想な兄に比べて、優

しいくて話やすい弟ならそりゃ弟の方が人気でるって」

…私も最初は幸くんの笑顔にドキドキしちゃったさ。

「でもね私が聞いた話によると智浩くんってすごい人見知りで、慣れた相手には幸浩くん並な笑顔で話すんだって～」

だから昨日は無愛想に見えなかったのかな？

私の中ではもう智浩くんの印象は変わってしまっている。できるならもっと沢山彼の事を知りたいと思うようになった。

昨日から智浩くんの事ばかり考えてる気がする。

「はぁ…」

「あっ、ため息。幸せ逃げるよ～？」

「なになに、恋患い？」

友達の声と同時に男の子の声がした。私達は後ろを振り向いた。その瞬間、

「「きゃあぁぁぁっ！！」」

うちのクラスの女の子達の悲鳴にも似た声があがった。かなりうるさい…。

「ははっ、みんな朝から元気だね」

幸くんもさすがにうるさかったのか、両手で耳をふさいでる。私は耳がキーンってしてるよ…。

「おはよう、幸浩くん」
「めぐちゃんおはよう」
あぁ、またあの笑顔。ほらクラスの子達も歓喜の声をあげてるよ。
「間宮くんすごい人気だね」
友達は動じずに、幸くんに話かける。他の子達は近付けずにいるのに、我が友達ながらすごい度胸だ。
「俺はそんなんじゃないよ」
「またまたご謙遜を」
「めぐちゃんのお友達？」
「うん、中西ゆかりっていうの。恵繋がりで仲良くしてね」
「めぐちゃんの友達なら俺の友達も同然だよ。こちらこそ仲良くしてね」
あんたちゃっかり幸くんと自己紹介しあったな…。ゆかりに向けられた嫉妬混じりの視線が私にも痛いよ。
「…ゆかり、あんた大物だわ」
「何かいった？♪」
確信犯め…。

「でも幸くんどうしてここにいるの？」

「たまたまだよ。」

「「たまたま？」」

「そう、たまたま」

ん～、よくわかんないなぁ。なんか笑顔で誤魔化されちゃった。

「…幸浩、遅刻する」

『あっ…この声もしかして』

振り向くと予想通り智浩くんが立ってた。今日はやっぱり不機嫌そう…。

教室の中はさっきとは違ったざわめきがおこっている。

でも私は“知り合いと話す時の”智浩くんを知ってるから、なんで不機嫌そうにみえるのか本当に無愛想なのかわかる。

「智浩くん、おはよう」

「おはよう、恵」

教室には結構クラスメイトがいたからちょっとだけだけど、微笑んで挨拶してくれた。「なんだよ、めぐちゃんに会えてラッキーだっただろ？」

「…いいから行くぞ」

意味深な幸くんのセリフ。でも智浩くんは無視みたい。

「仕方ないなぁ。めぐちゃん、ゆかりちゃんまたね」

先に教室を出ていく智浩くんに続いて、幸くんも出ていく。
私達は姿が見えなくなるまで手を振った。

「めぐ、ゆかり！！あんたたち間宮兄弟と知り合いなの！？」

二人がいなくなった途端に、クラス中の女の子達の襲撃にあった。
“質問攻め”より“襲撃にあう”という表現がぴったりはてはまる。
みんな目の色変わってるもん。

「そう♪名前で呼び合う仲」

「ゆかり…」

あんたは今日知り合ったばかりでしょ！！何もみんなを敵にまわさなくても…。
恐れてたら案の定、

「「あんたちだけずる～い！！」」

キレられた。女の嫉妬は怖い。普段大人しいあの子まで人格が変わっちゃってるよ…。
何も言わない私を置いて、ゆかりやクラスのみんなはヒートアップしている。もうすぐＨＲだけど、嫉妬火の粉が降りかかるまえに抜け出しちゃおう。

バレないようにこっそり教室を抜け出し、屋上へと向かった。

## 第9話（後書き）

ようやく恵の友達の名前が出てきました（笑）中西ゆかり（なかにしゆかり）です。
なかなか展開が進みませんが、頑張りたいと思います。
感想や意見ありましたら、遠慮なくいってくださいね

# 第１０話

なんとな～く気まぐれで、クラスの女の子達を避けるようにしてきた屋上なんだけど、実は今回来るのが初めてな私。
ドアを開くと、今までよりもちょっとだけ近くなった空が広がっていた。今日は雲一つない晴天だ。

「ん～っ」

さっきの緊張もあってか縮こまっていた背中や肩が、思いっきり伸びをしたらポキポキなった。
授業をサボるのって初めて。

「お昼寝でもしよっかなぁ」

入口から死角になるところによいしょと座った。壁にもたれてぼ～っとしていると本当に眠くなってくる。

「……すぅ…」

いつの間にか夢の中へ落ちていた。

私は走っていた。７組にいる友達に教科書を借りるために。
でも何故か私の走っている直線上は誰もいない…。構わず走り続ける私。

『あっ…あの時の』

そう、間宮兄弟に初めてあった時の夢だ。

『このまま行くと、また転んじゃうよ！！』

走る軌道を修正したいところだけど、私の体は思い通り動かない。なのにどんどん進んでいく。

『こけちゃうよ～っ』

そう思った矢先、夢の中の私の視界は反転した。この前同様背中に痛みを感じることはなく、かわりに温かい腕が私を支えてくれていた。

『幸くんかな…？』

また幸くんに助けてもらったかと思って、支えてくれてる人の顔を見ようと顔を上げるんだけど、逆光が眩しすぎて顔どころか首から上が影になって見えない。

『逆光でミルクティーみたいな髪の毛見れな～い！！』

今度は体全体を温かさが覆いはじめた。あの時はなかった温かさ…。夢の中の私の意識は遠くなり、眠りから覚醒しようとしていた。

『また幸くんに助けてもらっちゃった…』

覚醒する寸前うっすら見えた夢の人は、顔を赤くしはにかんだ笑顔で私の前髪を整えてくれた。

目を醒ますと私のいるあたりは日陰になってて、朝は心地よかった風がちょっと冷える。

「…今何時？」

ポッケから携帯を取りだそうと手を動かすと、肩にかかっていた何かが落ちた。

男の子の制服の上着だった。

「誰の？」

制服の内側の名前がかかれているところを見るとそこには、

———間宮

と書かれていた。

## 第１０話（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。
久々の更新でした！なんとな～く見えそうな展開だったような…。
次作は早めに更新できるように頑張ります！

# 第１１話

「ちょっと恵！！あんたどこにいってたのよ。もう四時間目だよ」
屋上から教室に戻ると、ゆかりがさっきの時間に使ったであろう教科書を乱暴にしまいながらいう。
「今日あんたの当たり日なのに、いないから隣の私がかわりに当てられて散々だったんだよ」
……だから機嫌が悪いのか。
当たり日というのは自分の出席番号がその日の日にちと同じだったり、先生によっては日付＋１０とか意味のわからないことして当てられる日ってこと。
「ごめん」
といって椅子に座る。
「あれ？その制服誰の？男の子の上着だよね」
ゆかりは目ざとく左手にもった制服に気付いた。そりゃ私が男の子の制服持ってれば簡単に見つかるか。
間宮兄弟どちらかの制服というべき？
「大きな声ださない自信ある？」
「あるある♪」
さっきの不機嫌さはどこへやら。早く言えと目がいっている。私は

ため息をつき、制服内側の名前をゆかりに見せた。

「間宮兄弟のどっちかの」

「……マジ？」

ちゃんと約束は守ってくれたようだ。だって『間宮』ってかいてあるから、どっちかしかないでしょ！？

「…で、なんで恵が間宮兄弟のどっちかの制服を持ってるわけ？」

「そう、そこなのよ。私もわかんないんだって。屋上にいったら寝ちゃってて、目がさめたらこれが私にかけられてたの」

「へぇ～…」

どっかのボタンですか？

「でも早く返さなきゃ駄目だよね」

朝は上着着てたのに、突然着てないとおかしいし。

「幸浩くんに会える口実ができてよかったじゃん」

「そうだね～」

幸くんに会えるもんね……ん？ちょっと待って。

「ゆかりさん」

「何？
「さん」
づけ気持ち悪いよ？」
「私、幸浩くんなんていってないよ？」
「あれ？幸浩くん狙いじゃないの？てっきり幸浩くんの事好きなのかなって思ってた」
私だって知りませんよ。そりゃ気にはなってたけど、好きとかそんなんじゃない…と思う。
「その様子だと好きとか自覚してないんだね。まあいいや、昼休みにでも返してあげなよ」
丁度いいタイミングでチャイムが鳴り、先生が入ってきた。
ゆかりに爆弾を投下され、授業中は
「幸くんのこと好きなのか」
についてのことで頭が一杯で授業は上の空だった。
当たり日なのでもちろん先生に当てられて、答えれなかったのはいうまでもない。

そしてまた、7組の前で制服を抱えて立ってる私。いつもは長い50分の授業なんて、悩みだしたらあっという間だった。
幸くんが好きなのかどうなのか、結論は出なかった。ここで転びかけたとき助けてくれたし　優しいし人気はあるけど、それだけで
「好きだ」
というにはなんか違う気がする。でもそんなのもありかな？と思っ

てる自分もいる。

「結局、好意はあるって事だよね」

「誰に？」

「ん、幸ひ…」

「幸浩くんに」

といいかけて、やめた。誰かが後ろにいる？

ゆっくり回れ右をすると、にっこり笑った幸くん本人がいた。

「！！！！」

「やぁ、めぐちゃん」

鳩が豆鉄砲をくらった顔って、今の私の顔だと思う。相当不細工な顔して驚いてる私。

「俺に好意って…？」

「なっ…なんでもないの！！これありがとね、じゃあ」

半ば押しつけるようにして幸くんに制服を渡し、私は教室へ向かって走る。好意を持ってるってバレたよね？なんかすごく恥ずかしい…。

勢いよくドアを閉めた。気がつくとまた屋上に来ていた。

# 第12話

「はぁはぁ……」

肩で息をするほど全力で走ったみたい。屋上に慌てて来たものの、幸くんにバレバレだろう。

『好き』とハッキリしてたならまだよかったんだろうけど、生憎今の段階では『好意を持ってる』くらいしか思ってなくて、正直次に会うのが複雑な気分。

「なんで逃げたんだ、自分…」

自分のアホさに呆れる。好意を抱いてることがバレたうえに、走って逃げるという失礼な行動は複雑な気分に拍車をかけた。

「あっ…お昼ご飯食べなきゃ…」

どんなに失敗をしても腹は減る。早く制服を返さなきゃと思ってたから、ご飯は食べてない。ご飯のことを思い出したらぐぅ〜っと音が鳴った。

『腹が減っては戦はできぬ』じゃないけど、取りあえずお腹を満たしてから考えよう。

ドアを開け校舎に入ろうとすると…、

「ちょっと待って、開けてて」

沢山の荷物で両手が塞がれた男の子が、階段を登ってきた。今から屋上でお昼食べて、みんなで遊ぶのかな？

私は男の子が屋上に出るまでドアを開けたまま待った。

「ありがとう、助かったよ」

そういってはにかんで笑った顔が、この前みた智浩くんの笑顔に似ていた。

教室に戻るとクラスのほとんどがご飯を食べ終え、友達と話したり遊んだり本を読んだりしていた。隣のゆかりはというと、

「あんたは男子生徒かよ」

ツッコミたくなる様な格好で寝ていた。
席につきお弁当を広げる。唐揚げにポテトサラダ、今日のメニューは私の好きなものばかりだ。

「…ん～…もう食べれない…」

匂いに反応して、マヌケな寝言をいう私の友達。なんか一気に疲れちゃった…。

お腹も一杯になり、弁当箱を片付ける。いつもご飯の後はゆかりとお喋りだから、今日はやることがない。
少し考え私の席は窓側だから、外を眺めることにした。

運動場ではサッカーをしている男の子達、木の木陰でお喋りしている女の子、今登校してきたらしき眠そうな生徒と色々な人達がいる。
パッと見何十人といるのに、なんでわかってしまうんだろう。

「あそこでサッカーしてるの、間宮兄だよね」

ゆかりが欠伸しながらいった。

「あんた起きてたの？」

「隣で何回もため息をつかれたら、起きちゃうよ」

「そう…」

そんなにため息ついてたんだ？

サッカーをしている集団の中に確かに智浩くんがいる。周りは知り合いばかりなのか、時には笑顔を時には悔しそうな顔を見せながら楽しそうにサッカーをしていた。

「……知ってる？間宮兄って男の子達といるとあんな表情を見せるから、昼休みにわざわざ運動場に出て見にくる女の子いるんだって」

だから木陰に女の子達がいるのか…。よく見ると智浩くんの方をみて、何やら言っている。

…『知り合いにしか見せない笑顔』は簡単に他の女の子達にも見せてるじゃん。

「智浩くんも人気者なんだね…」

私はなんだか面白くない。

『知り合って間もない女の子を呼び捨て呼ぶって、特別な感じだな』

といった智浩くん、

『知り合いの少人数しか』

といっていたのに、しっかり大人数に見られてるよ。
『特別な感じ』がするなら、私にだけ特別にして欲しかった。
知り合って間もないのに、なんだかヤキモチやいてるみたい。

「おっ、なんか自覚したな♪」

ゆかりの意味深なセリフ。
でもまだ幸くんの事もあり、気持ちには決着はつかない。

……つけるのが何となく嫌だった。

# 第１３話

時はあれから、数週間が経った。幸くんから走って逃げて以来、間宮兄弟には会っていない。幸くんはもちろんのこと、何故か智浩くんとも会えずにいた。
会う用事があるとかじゃない。だけど折角話せるようになったのに残念なような…。
でもだからといって、用事がないのに二人に会いに行く勇気はない。
そんな葛藤が続いた。

あの昼休みから習慣が増えた。それは昼休みには決まって運動場を見ること。気持ちにも決着はついていないし二人への感情はあの時から変わることもなく、心の真ん中をズシーンと占領していた。ゆかりは、

「私はどっちかのファンって訳じゃないけど、どっちつかずってのも敵が多いよ」

という。確かにそうだろうけどまだ好きとかそういうのじゃないし、思ってみれば今の私達の関係でそこまで発展するわけがない。
例え私がどちらかが好きでも、二人にそういう感情があるわけない。
ここ数日『二人のどちらかが好きか』という決着はつかなかったけど、『二人を好きになってもただの一人相撲』という結論は出た。

「でも何で昼休み、サッカーしてるのを見てるの？」

「……私が私に聞きたい」

そう、はっきりいってわからない。今はっきり言えるのは『なんとなく見てる』という事。

「…恵の言葉でいうと『幸浩くんには好意を持ってて、智浩くんは気になる存在』？」

…ズバリ言い当ててるし。私の図星な顔で正解とわかったのか、

「中西ゆかり、やりましたーっ！！褒めて褒めて♪」

ゆかりはガッツポーズをしてはしゃぐ。とりあえずよしよししてあげた。

友達付き合い長いけど、たまに発揮される鋭さには驚く。

余りにも大声だったらしく、クラスのみんながゆかりを見ている。

「あんた声がでかいよ」

「ごめ～ん……あれ？」

「どうしたの？」

ゆかりが私の向こう側に何かを見つけたらしく、固まった。何事かと思い、私はゆっくり振り向いた。

振り向いた瞬間、私も固まった。……思い出される、あの日の昼休み走って逃げた時の恥ずかしさ。私は自分の顔が赤く染まるのがわかった。

――――入り口には幸くんがいた。

# 第１４話

幸くんが教室に現れてから、私はどうやってここにきたか全く覚えてない。確か……

「やぁ、めぐちゃん、ゆかりちゃん」

教室の入り口にいた幸くんはゆっくり私達の方へ近付いてきた。

「めぐちゃんちょっといいかな…？」

幸くんは笑ってるけどいつもと違って、あの笑顔は少しくもっているように感じた。

『何で幸くんが会いに来てるの～っ！？』

私が脳内プチパニックを起こしていると、

「ほらっ、恵いっておいで」

ゆかりに背中を押され、半ば強制的に私は幸くんの傍に行く。もちろん心臓はバクバク。幸くんと二人っきりは無理だよ～っ。

「じゃあ恵をよろしくね」

「ありがとうね、ゆかりちゃん」

――――――それからいつの間にかどっかの階段の踊り場に来ていた。自分でちゃんと歩いて来れたのかすら自信がない。

「そんなに緊張しなくたって、取って食べちゃう訳じゃないよ」

幸くんは苦笑して、私の額にデコピンをした。

ピンポイントに当たったのか、意外と痛くて思わず額を押さえてしまった。

「ゴメン、ちょっと意地悪しちゃった」

「…酷くない？」

「しょうがないよ、めぐちゃん走って逃げたまま会いに来てくれないからさ。ちょっと意地悪したくなったんだよ」

いきなり本題ですかーーっ！！私はその話題には触れてほしくなかったのに、幸くんはいとも簡単に話をふってきたよ。

「俺、結構ショックだぉたんだけとな。女の子に逃げられてさ」

「は…ははは…」

もう笑うしかない。当たり障りがない程度に早くこの話題を切り上げたい…。

「でさ、あの時俺に好意があるとかないとかいってた様に聞こえたんだけど…」

「……」

「…どういうことか教えてくれない？」

さっきの表情からは変わって、幸くんは真剣な顔で私を見る。笑顔とは違う幸くんの真剣な眼差しに、ちょっとだけドキドキしてしまう。同時に、智浩くんもこんな表情をするのかと思ってしまった。

私は幸くんを通して智浩くんを見ていた。

「俺はめぐちゃんが好きだから、めぐちゃんが俺に少しでも好意を持ってくれてるなら付き合ってほしい」

幸くんからの告白。あり得ないと思っていたことが、起こってしまった。

「会って間もないのに、何で好きになったか不思議そうな顔してるね」

「だって…」

「めぐちゃんが俺に好意を抱いてくれてるのと同じだよ。君だって、ちょっとしか話した事ないのに俺に好意を持ってくれてる」

女の子達に人気の幸くんが、私を好きだという。私が幸くんに好意を抱いているのと同じように、ただ『好き』と思ってくれている。私は『好き』ではなく『好意』なのに…。まだ決着はついてないのに…。

「返事は明日くれないかな？他の奴に先越されたくないから」

『いい返事待ってるよ』そういって幸くんは階段を降りていった。

その後授業を受ける気にもなれず、最近よく来るようになった屋上でサボることにした。今日の空は今にも雨が降りだしそうな、曇り空だった。この前昼寝をした場所に座り、空を仰いだ。

幸くんからの告白、嬉しいに決まってる。ミルクティーの様な柔らかい髪の毛とか優しい笑顔とか、いつも見ていられるならどんなにいいことだろう。

「こらっ」

今一番聞きたくて聞きたくない声がする。

智浩くんだ。

「授業サボっていいのか？」

智浩くんはコンビニの袋を下ろし、私の隣に座った。コンビニ袋から雑誌が透けて見えるところから、最初からサボる気だったのが伺える。

「智浩くんこそ…」

「俺はいいの。成績優秀だから」

ニヤリと笑う姿は、やっぱり幸くんとは違っていた。でも今は見たくない。

私はうつ向いた。

「…なんか元気ないな」

「うん、ちょっとね」

智浩くんは袋から雑誌を取り出す事もなく、私がさっきしていたように空を仰いだ。

「…曇りはなんかそういう気分にさせるんだよな。普段は平気なのに、曇ってるだけで何となく気持ちも落ち込む」

私が落ち込んでるように見えたのかな？

「ねぇ、智浩くん」

少しの沈黙の後、私は話かけていた。

「何？」

「知り合ってから間もないのに、好きになるとか付き合うってどう思う？」

## 第15話

「……俺はあり得ないと思う」

「えっ…」

私の『知り合ってすぐに付き合えるか』の質問を智浩くんは否定した。

「なんだよ、その質問。告白でもされたのか？」

久しぶりの会話なのに智浩くんの言葉は私の耳には届かなかった。

――――『あり得ない』智浩くんのその一言が、胸を締め付ける。

「……っ！！」

私は何もいわず立ち上がった。あり得ないとはつまり、私のこともそういう対象には見れないということであり…。

「…幸なら『付き合える』っていうんだろうけどな」

幸くんはね。でも『智浩くん』は？あり得ないの？

「…私、幸浩くんに付き合おうっていわれた…」

「…よかったな。幸みたいに人気者に告白されて。俺みたいな無愛想な奴に告白されるより全然いい」

立ってるから、智浩くんの頭しか見えない。でも今は顔を見られた

くなかったし、智浩くんの顔が見れなくてよかった。
私なんか泣きそう。智浩くんの顔みたら涙が溢れそうだから――――。
好きな人に『告白されてよかったな』なんていわれたくない。

私は智浩くんが好き。

知り合って間もないし、数える位しか話した事ないけど好き。きっかけなんてわかんない、でも好きと思ってしまったから止まらない。

「…返事してないんだろ？」

その先のセリフ、なんとなく想像できる。でもお願いだからいわないで。私、貴方だけにはいわれたくない…。

「恵が幸に好意を持ってるのはなんとなく分かってた。…付き合えよ」

空が遂に泣き出した。ポツポツと大粒の滴を落とし、制服に染みを作る。
私の瞳からも大粒の涙が落ちる。気持ちに気付いたのに、早くも終わってしまった。伝える間もなく砕けてしまた。

次の日、私は幸くんに返事をした。もちろん付き合うという返事。

元々好意はあるんだから、好きになれるはず。

「好きになりそうな人はいたけど、告白する前に終わっちゃった。
それでもいいの？」

最初にいったけど、幸くんは

「これからそいつ以上に俺を好きになってくれるなら、いいよ」

そういってくれた。
甘い考えだと思った。汚いと思ったけど、それでもいいといってくれた幸くんを好きになりたいと思った。

何より智浩くんへの想いを忘れたかった。

# 第１６話

私は幸くんと付き合いだした。ゆかりは驚いてたけど、『よかったね』といってくれた。
心の中ではずっと
「幸くん」
と呼んでたけど、本人の前でもそう呼ぶようになり幸くんも
「めぐ」
と呼ぶようになった。初めはくすぐったかったこの呼び方にも慣れて…。
昼休みのあの習慣もなくなった。お昼は幸くんは決まって中庭で食べようって誘ってくれたから、運動場を見れなかったし私も見たくなかった。
幸くんと付き合ってるに、何故か兄である智浩くんと会うことはなかった。

「恵〜、幸浩くん来たよ〜」

クラスメイトが私を呼ぶ。こうして幸くんは教室まで迎えに来てくれて、用事がない日は一緒に帰る。

「はいは〜い、今行く〜」

ゆかりとの話を切り上げ、私は慌てて鞄に荷物をつめた。幸くんを待たせちゃ悪いしね。

「……そういえばね、智浩くん最近口数が更に減ったんだって」

「…あとは宿題のノートと…」

「なんかあったのかな？」

ゆかりの話は聞こえないふりをした。
ゆかりはたまにこうやって智浩くん情報をいってくる。

「じゃ、また明日ね」

「……また明日」

私は鞄を持ち、手を振って教室を出ていく。

「…恵、それでいいの？」

「幸くん、お待たせ」

「ゆかりちゃん、何かいいたそうな顔してるけどいいの？」

「いいのいいの。さっ、行こっ」

私達は並んで昇降口へ行く。他愛もない話をして手を繋いだりして、
知り合った頃にはあり得なかった事が起きてる。

「…それでねゆかりが…」

いつものようにその日にあった面白い事を話していたら、幸くんは昇降口のちょっと手前にある階段のあたりで止まった。

「幸くん？」

目線の先は階段の踊り場、私達より上にいる男子生徒。

「智、どうしたんだよ」

智浩くんがいた。聞こえないフリして聞いたさっきのゆかりの話通り、無愛想というか不機嫌オーラが全開。ちょっと怖い。

「睨んでたってわかんないだろ？」

さすが兄弟、怖じけずに不満をいう。まあ、幸くんのいうことは正論だけど。

「別に」

智浩くんは他に何もいうことなく、また階段をのぼっていった。なんだったんだろう？

「なんだ、あいつ」

幸くんも謎みたい。会話も特に無くて私はかえってよかったけど。

「さっ、帰ろうか」

靴を履き替え昇降口を出て、幸くんと正門に向かって歩いていく姿を智浩くんが校舎から見ていたことも知らず、私は学校を後にした。

## 第１７話（前書き）

番外編みたいなかたちで、恵と幸浩の朝の風景をかいてみました。

# 第17話

――夢を見た。

とてもとても優しい夢。夢の中の私はすごく幸せそうに笑っている。隣には幸くんかな？髪の毛が明るい色した男の子がいる。後ろ姿しかみえないけど、私には誰かわかる。

『夢の中の私、幸せなフリして裏でははは凄く辛そうにしてるんだよ？現実の私はこんなに幸せなのにね』

夢の中の私が男の子にいう。男の子は私を抱きしめて、耳元で何か囁いた。その声は私には聞こえない。

二人は顔を見合わせ、時々クスクス笑っている。

二人はこっちを見た。

『素直になりなよ、あとで後悔するよ』

夢の中の私は確かにそういった。男の子の顔を見ようとすると、突然視界が真っ白になり目覚ましの音が遠くから聞こえた。

『あぁ、目が覚めちゃうんだ…』

夢の中の意識が遠ざかるのを感じながら、瞼を閉じた。

ジリジリジリ

さっきからやかましいかと思ってたら、やっぱり目覚ましか…。音を立ててベルの停止ボタンを押す。

「ふぁ〜〜」

伸びをしながら一発、盛大な欠伸をする。背中がポキポキとなった。

「なんかすっきりしたような、しないような夢見たなぁ」

内容は覚えていない。すっきりしたようなしないような、という感想しかない。

「まっ、いっか」

早く着替えてご飯食べなきゃ幸くんが迎えに来ちゃう。

まだ布団に入っていたい気持ちを堪えて、洗面所へと向かった。

幸くんが迎えにくるジャスト五分前、完璧に準備を終えて玄関の外で待つ。

一回寝坊をして幸くんまでも遅刻にしてしまった前科を持つ私はそれ以来、二度寝は辞め五分前には幸くんを待つようにしてる。何度か危ないことはあったけどね…。

「あれっ？めぐ、今日も早いね」

幸くんも三分前には到着。

「おはよう、幸くん」

「おはよ〜」

彼女の特権、朝から見る笑顔は最高。

「幸くんこそいつも早いよね。私毎朝必死に用意するんだよ」

「女の子の朝って大変そうだもんね。男なんてその点楽だよ。寝癖を直してちょちょい」

「そういってる割には、この辺ウネウネしてるよ」

髪の毛の後ろの部分を触ってみる。

「えっ、嘘」

幸くんは慌てて手で直そうとするけど、手は全然違う箇所を触っていた。

付き合ってから判明したんだけど、幸くん意外とあわてんぼうなところがある。

「ちょっと待って、私クシ持ってるから」

鞄から取り出し髪の毛を直してあげる。柔らかい髪の毛だから、割りと素直に直ってくれた。

「はいっ、完了。男前の出来上がりっ」

「ありがと〜」

幸くんとの登校はいつもだいたいこんな感じ。他愛もない事だけど毎日がとても楽しい。

今朝もこんなふうだったから、すっきりしない夢のことなんて忘れてた。

# 第１８話

放課後一人教室にいた。
外は大雨、私は居残りで宿題をやっている。
夕べ宿題をやるのを忘れ、運悪く教科担任は機嫌がすこぶる悪かったらしく宿題を提出するまで帰るなといってきた。

「大雨だし、傘ないし丁度いっか」

と思っていたら、宿題難しいし雨が止む気配は全くなし。それどころか遠くの方で雷が鳴っている。

「悪化する前に早くやろ…」

生憎幸くんは用事があるとかで、先に帰っちゃった。私は再びノートと睨めっこする。

睨めっこ開始から１５分、苦手な分野の宿題ほどやる気がわかないものはない。並んだ文字もただの記号の集まりに見えてくる。

「あぁーっもうわかんない」

全く進まない宿題、私は逃げ出そうかと本気で考えていると…

ゴロゴロゴロ…

雷がまたなった。外を見れば、バケツをひっくり返したような大雨。

「あ〜あ…」

宿題をやる気も家に帰る気力もなくなった。
取りあえずやる気のなくなった宿題のノートはしまい（明日ゆかりにでも見せてもらう）、窓枠に肘をついて灰色というより黒に近い空をみた。

さすがに運動部も部活はやっていない。

「当たり前か…」

そういえばこうして運動場を見るのも久しぶりかもしれない。前は当たり前だったけど、今は全然見ないし見る機会もない。
こうしてるとやっぱり思い出してしまう、あの人の事。
幸くんには一回、好きだった人の事を聞かれたことがある。兄弟な訳だし鋭い所あるから、誰の事かは気付いていたと思う。だから幸くんは、それを知っていて中庭に連れだしてくれたのだろうか…。

「相変わらず…」

声がした。振り向かなくてもわかる。あの日以来聞きたくて聞きたくなかった、でも聞けなかったあの人の声。感傷に浸っていたせいで、幻聴が聞こえたのかな？

「聞き間違いとか思ってるなら、そのまま聞いて欲しい」

初めてあった時のような、低めの声。しばらく姿も見ていない。
できれば当たってほしくないし、当たっていてほしい。

だから私は振り向かずに、外を見たまま耳に全神経を集中させた。
「幸と付き合ってるのは聞いた。この前ので、決心したんだな」
「……」
「自分からいっておいて今更だけど、できればあいつと付き合って欲しくなかった…」
言葉も出ない。
「恵が幸せになれば…って思っていったけどやっぱり、例え幸とでも他の奴と仲良くしてる姿は見たくない」
その言葉…前の私と同じ気持ち、幸くんと付き合う前に聞きたかった。
今はただ心を苦しめる言葉でしかない。
「卑怯なのはわかってる。俺は恵が好きだから。ただそれだけを伝えたかったんだ」
智浩くんは最後にそれだけいうと、教室を出ていった。
「…本当卑怯だよ」
やっと気持ちが落ちついて心と向き合って、幸くんの事智浩くんより好きになれると思ったのに…。
それまで凄くすごく時間が必要だったんだよ。
なのに智浩くんの一言で、簡単に決心が揺らいじゃう。
声を聞けただけでもこんなに切ないのに、告白なんて聞いたらどう

にかなってしまいそう。

幸くんがいるのに…、私が

「智浩くんが好き」

って知っていても付き合ってくれる幸くんがいるのに…。

「……っ」

あの時のような大粒の涙が、教室の床を濡らした。

なぜ涙を流したのか、その意味はわからなかった。

## 第１９話（前書き）

今回は幸浩視点です

# 第１９話

「あれ？めぐは？」

めぐの教室に入ると、その姿はなく隣の席のゆかりちゃんに聞いた。

「あっ、おはよう幸浩くん。あの子まだ来てないんだ」

「えっ、おかしいな…」

いつもの様にめぐを迎えに行ったんだけど、家の前にはめぐの姿はなくておばさんに聞いたら、

「てっきり幸くんと行ったかと思った」

との事で、俺は先に学校に来ているのかと思ってた。

「恵と一緒じゃないの？」

「あぁ…そうなんだよ」

おかしいな…今までそんな事なかったのに。

ゆかりちゃんにありがとうとお礼を言って、教室を後にした。めぐと付き合いだしてから、こんな事ははじめてだ。

自分の席につき、教室やらノートを机に広げる。隣の智はまだ学校に来てないらしい。

俺達は双子なせいか、くじ引きで決められる席も隣になる率が高い。

変な所で意識疎通が出来ててはっきりいってなんか嫌だ。

兄弟だけど一緒に登校をするわけではない。だけど見た目に反して真面目なコイツが、俺より遅いのも珍しい。
なんかムカついたから、椅子を蹴ってやった。

「…なにやってんだよ」

この低めで、最高に機嫌悪いですって感じな声は…

「遅いじゃん智」

俺の片割れ。
しっかし今日はいつもに増して不機嫌そうな顔…。双子の片割れなんだから、愛想よくすりゃコイツもモテるだろうに…。

「お前には関係ないだろ」

「なんでそんな機嫌悪いんだよ」

お前には何もしてないっつーの。…椅子は蹴ったけど。
智は椅子に座り、鞄から教科書を取り出した。

それにしてもめぐどうしたんだろ…。黙って学校に行くなんて初めてだし、教室にもいないならどこにいったんだ？
可愛い彼女ですから、心配しますよ。そんなこと思ってたら智が変な事をきいてきた。

「…なぁ、今日恵どこかおかしくなかったか？」

コイツは何故かめぐの事を呼び捨てでよんでる。ちょっと気にくわないってのは、俺の秘密。

それより、その意味深なセリフなんだよ。

「いや、今日はまだ会ってないんだよ」

「えっ…だって幸、お前恵と一緒に登校してるんじゃ…」

俺そのこと智に話したことあるっけ？記憶にないけど、まぁいいか。

「だ～か～ら～、会ってないもんは会ってないの！！」

すると智は

「え〝っ」

って顔した。この顔は驚いてる顔だ。いや、驚きの中になんか後悔みたいなのも混じったような…そんな表情。

「めぐにしては珍しいから、俺も心配してたとこ」

「…そっか」

智はそれっきり黙り込んでしまった。コイツ黙ってるとやっぱ無愛想だわ。

「…昨日なんかあったのかな」

それから昼休み、掃除の時間とめぐを訪ねに行ったけど、やっぱり今日は学校に来てないみたいだ。

「学校にっていうか、教室に来てないみたいなんだ。恵らしき後ろ

姿を校庭でみたんだ」

「ゆかりちゃんが見たっていうなら、本当なんだろうね。なんで教室にこないんだろ？」

「……私の勘だけど、昨日何かあったのかも」

「昨日？」

昨日といえば確か…、めぐは宿題忘れて居残りさせられるっていってて、俺は用事があったから先に帰ったんだよな…。

「幸浩くん本人にいうのもなんだけど、あの子最近はマシになったんだよ」

「…何が？」

もしかして、もしかする？

「好きだった人の事を引きずってたの。ショックな事があったみたいで」

ビンゴ。男って鈍感っていわれるけど、俺はそうじゃなさそうだ。

「その人と何かあったのかも…」

……ちょっと待て、“好きだった人”の名前は直接聞いたことはないけど、誰かはなんとなくわかる。ほぼ間違いないだろう。だけど、そいつとなんかあったってことは俺としても非常にマズイ。だって俺は、そいつの気持ちも知ってる。今も変わってないことも。

「幸浩くん、誰のことといってるかわかるよね」

あぁ、わかるよ。奴はいわば俺の分身でもあり一番の理解者でもある、

「昨日この教室から智浩くん？を見たって子がいるんだ」

――――双子の兄、智浩だし。

# 第２０話

学校がこんなに嫌に感じるなんて思ったことなかった。
好きだった幸くんの笑顔も、智浩くんの声も顔も何も見たくない。

親に心配はかけないようにとりあえず学校には来た。でも教室には入らずただ校庭の人目につかないところで、ぼ～っとしてるだけ。
何も考えずに寝転がって流れる雲見たり、鳥が飛んでいく先を予想したり。
遠くからは体育をしてるクラスのはしゃぎ声、抜き打ちテストがある事が発表されたのか
「え～っ」
というブーイングの声が聞こえる。

いつもは自分もいるはずの場面が遠くに聞こえ、なんだか仲間外れにされたような気分。

「これからどうしよう…」

いくら現実逃避したところで、問題は解決してくれない。まして自分自身のなかの問題なら尚更。

「“好きだった智浩くん”と“好きになれそうな幸くん”か…」

智浩くんの告白を聞いて揺らいでしまった私の心はまだ幸くんの存在だけではないってわけで、智浩くんの事がまだ好きだという可能性だってある。
私は幸くんと付き合ってて、でも完全に幸くんだけが好きだという

自信もないことに気が付いてしまった。

「〜〜〜っ、誰か私を埋めて〜っ」

自分の優柔不断さというかいい加減さに嫌気がする。

ポッケに入ってる携帯が震えた。見なくても誰かはわかるが、一応確認する。

メール受信

ｆｒｏｍ　間宮　幸浩

本日何回目かのメール。心配してくれてるんだろう。でもなんかメールも見たくなくて、本文を読まずに携帯をしまった。

「…私、最低」

「やっぱり反応なしだ…」

携帯を閉じた。何回かメールを送ってみるけど、めぐからの反応はない。

時は放課後。めぐとゆかりちゃんの教室に俺、ゆかりちゃん、そして今回のめぐの異変の元凶、智浩がいる。

昼休みにゆかりちゃんから話を聞いたあと、智浩に聞いてみりゃ案の定吐いた。

『俺は恵が好きだ、お前には関係ないだろ』

『…はぁ？』

『別にお前らの仲を壊そうとかじゃないから』

いけしゃあしゃあといってくれるから、普段温厚な俺もさすがにキレた。

『…っふざけるなっ！！お前が今更になってそんな事いうから、めぐが困るんだろ』

あまりにも声が大きかったのか、クラス中が俺達を見ていた。
なんかムカついたから睨んでやったら、ヤバいと思ったのか目をそらした。

『好きとかいってるけどだいたいお前、めぐの事ふったんだろ？』

これはめぐ本人からはっきり聞いた。
『好きな人がいるけど、付き合うのはあり得ない』
っていわれたって。

ここでこんな言い合いしてもしょうがないから、放課後逃げようとする智の耳をとっ捕まえて引っ張って来てやった。

凄い形相で智の耳を引っ張って歩いてくる俺の姿をみて、ゆかりちゃんは笑ってた。
智の耳は赤くなっている。ざま～みろ。

「キミが智浩くんだね？」

ゆかりちゃんは面白いものを見るかのように、智をみる。
痛さなのかゆかりちゃんが初対面だからなのか、奴の顔は無愛想さMAXだった。しかしゆかりちゃんは動じることなく、

「さっすが、噂通りの無愛想っぷりだねぇ～」

といってのけた。
──この子……大物だ。

「…で、なんで俺はここに連れてこられた訳？」

耳を引っ張って来たのを根に持ったのか、睨みながら俺にいってきた。謝ってやんないけどね。

「お前はめぐを探す責任がある」

「はぁ？」

「お前の自分勝手な発言が招いたことだろ」

「あっ、やっぱり智浩がなんだ」

ゆかりちゃんも感づいてたのか…。それともめぐ本人から聞いたのだろうか…。

「あっ、私が勝手にそうじゃないかなって思ってただけだからね」

女の子ってすごく鋭いんだな…。

「でもさ…幸くんも感づいてたんだよね、智浩くんの気持ち」

「そうだよ、だって双子だし好みは一緒だからね」

智と恋のライバルなんて嫌すぎるから、あえて気付いてないふりをしてた。

「でもまさか付き合うチャンスをくれたのが、智だったなんてな…」

きっかけをくれたのが智だと思うと、はぁ…っとため息がでた。

「…で、その恵をどうやって探すんだよ」

「電話もメールも効果なしだし…」

そうなんだよなぁ…、こっちからいくらメールしても反応がないし…。そんなに広くはないとはいえ、校内を探すのもちょっとなぁ…。

「だいたい、恵がどこにいるかもわかんないんだろ？」

「…まぁな」

「電話もメールも駄目、居場所もわからない。なら呼び出せばいいだろ」

「「呼び出す？」」

ゆかりちゃんと俺、智の発言により初ハモり。見事に言うタイミン

グが合った。

「でも、携帯からじゃあの子でないんだよ？」

「校内放送で呼び出すしか……」

……ん？

「あっ！！その手があるよ」

「「校内放送で、呼び出す！！」」

本日ハモり二度目。ゆかりちゃんもピンときたらしい。

智はニヤリと笑った。やっぱりコイツ意外と賢いというか…。

「でもどういう理由で呼び出すの？」

智はゆかりちゃんに慣れたのか、無愛想どころか悪戯大好きな小僧の笑みを浮かべていた。呼び出す理由は秘密らしい。

「お前、最近初対面の人に免疫できたよな」

「別に俺は無愛想ではないけど？」

……さすが俺の兄貴。

# 第２１話

「――――――ください――――します」

遠くから声が聞こえる。

「繰り返します。朝比恵さん、至急生徒指導室まで来てください」

はい、私が朝比恵です…。まだ結婚もしてませんから、どうあがいても朝比さんちの恵ちゃんです。昔からおっちょこちょいですが、親に心配はかけたことがありません。

「だから生徒指導室に呼ばれる覚えはありません！！」

寝ぼけるのはいい加減にして、生徒指導室に呼び出される放送で目が覚めた。どうやら校庭でお昼寝をしていたらしい。

頭の上にいたお日様も西に傾きそろそろお月様が顔を出そうとしている頃だった。

今なら誰にも会うことはなく、校舎に行けるだろう。指導室に呼ばれる覚えはないけど、呼び出されちゃ無視するわけにはいかない。

そうと決まると私は立ち上がり、スカートについた葉っぱを払うと昇降口へと向かった。

「なんかしたかなぁ…私。授業サボったのだって今日が初めてだし」

ところ変わってここは生徒指導室前。来てみたはいいものの、今日の事を除けば指導される覚えはまったくない。
でも授業をサボる生徒はたまにいるし、だいたい一回サボった位で呼び出してたら指導の先生も大変だ。

「まいっか。怒られるならさっさと怒られちゃおう」

私は何にも疑いもせずに、生徒指導室の扉を開けた。

中はカーテンが閉めきられてて真っ暗だった。

「せ…先生？朝比恵来ましたけど…」

一応声をかけてみたけど、返事はない。恐る恐る中へと足を進める。
教室の真ん中まで来ただろうか？

――ガチャン

扉に鍵がかかる音がした。私は音に驚き後ろを振り向いた。
同時に電気がつく。暗かった為に目はすぐには慣れず、そばに人がいるのも気づかなかった。

めぐの呼び出しが入る5分前、俺達は相変わらず教室にいた。

「そういえば恵を呼び出すのはいいけど、理由はどうするの？」

というゆかりちゃんの発言に、俺も智も一気に勢いを失った。

「そうだよな…」

「理由がなきゃ放送すらできないよな…」

いいアイディアが浮かんだと思ったのに、また壁にぶち当たってしまった。

三人で悩んでいると、放送を知らせるチャイムが鳴った。何だろう？

「呼び出しします朝比恵さん、至急生徒指導室まで来てください。繰り返します――」

「「その手があった！」」

初めから嘘つきゃよかったんだよ！適当に理由つけて呼び出せば簡単だったのに。この時間なら生徒指導のじじいも帰っていないだろうし、指導室に呼び出すには絶好のチャンスじゃん。

「あれ？じゃあ誰が恵を呼び出したの？」

そのセリフにはっとした。確かにそうだ、誰が呼び出したのだろうか？さっきもいったように生徒指導のじじいはもう帰ってるはずだ。俺らの他に嘘つかってめぐを呼び出す奴といえば…。

――バタンッ！

もの凄い音と共に開いたドア、走っていく智。めぐを呼び出した奴がわかったのだろうか？

「もしかして、幸浩くんか智浩くんのファンの子たちかな…？」

ゆかりちゃんの言葉にヒヤリとする。
俺達兄弟を慕ってくてる女の子達の集団がいるのは知ってる。
でもなんで彼女達がめぐを呼び出す必要があるのだろうか？

「幸くんにはわかんないかもしれないけど、女の子ってそういう生き物なの」

ゆかりちゃんは苦笑した。

「モテる男の子と親しかったり好かれてると、ヒガミをかっちゃったりね…。周りからみれば中途半端な気持ちでいるめぐが悪いんだろうけど、そのヒガミの矛先は男の子よりもその対象となる女の子に向けられることが多いんだよ」

…怖いな、女の子。
だったらめぐの身が危ないのではないか？

「智浩くんはすぐに感づいたんだね」

ゆかりちゃんのセリフには“はっ”とさせられることが多い。
めぐを呼び出した奴が誰かわかり、すぐ走っていった智。
だからあぁやってめぐのところに行ったんだろう。
それなのに俺はそんなことに気付かずボケっとしていた。

なんとなく智の気持ちに負けてしまった気がしてしまった。

# 第２２話

暗かった部屋が一気に明るくなりようやく明るさに慣れた頃、私は険しい表情をした大人っぽい女の子達に囲まれていた。

「……」

みんな無言で私を睨んでるから、怖さ倍増。呼び出しっててっきり生徒指導のおじいちゃんかと思ってた。

「ねっ…ねえ、先生知らない？」

「……」

「私、先生に呼ばれてここに来たんだけど…」

「生徒指導のおじいちゃんならいないよ」

女の子達のなかの誰かがいった。なんかここの雰囲気めちゃくちゃ悪く感じるのは私の気のせい？

「えっ…だって私ここに呼び出されて…」

もしかして…

「呼び出したのは私達」

やっぱり…。嫌な予感ほどよく当たる。でもこの場合、ハズレてほしかったなぁ…。

「あなた、なんで私達に呼ばれたかわかるよね」

わかってますよ。だって私も女だし、事情はわかる。元はといえば、中途半端にしてる私が悪かったんだから。中途半端だったという自覚はある。

「その様子だと自覚はあるみたいだね」

「あなた智と幸のどちらかにしなさいよね。付き合うなとかはいわないけど、独り占めとかってさナシじゃない？」

部屋には3人女の子がいて、1人はリーダー格の子、1人はその子分ぽい。残りの1人は内気そうな子。

この面子と状況をみると、なんか因縁つけられてるというか、圧倒的に私が不利。

黙っていると案の定、

「あんたのせいで、智にフラれた子いるんだから」

なんていってきた。

「ちょ…ちょっとまってよ。確かに私は幸くんと付き合ってて智浩くんとも繋がりが全くないわけじゃないけど、だからってフラれたとか言われても…」

きっと内気そうな子がフラれたんだろう。2人は友達で、フラれた友達を思って私にいってきてるんだろうけど、そんなこと私に言われたって…。

「何よ、あんたがフラフラしてるから悪いんでしょ？」

それはそうなんだけど…。

私にはまだ心の整理ができていなかった。

だけどこのままズルズル幸くんと付き合うことはできない。

……なんでそう思うんだろう。

「なんとかいいなさいよ」

リーダー格がしびれをきかせたその時、先程鍵をしめられたはずのドアが大きな音をたてて開いた――――いや外れた。

「……アンタらそれは卑怯だと思う」

そこにいたのは肩で息をした智浩くん。幸くんじゃなくて智浩くんが駆けつけてくれた。

助けに来てくれた嬉しい気持ちと、会いたくなかった気持ちが交差する。

「とっ…智」

「これはね…」

女の子達は突然の智浩くんの登場に、見られたくない現場を目撃され焦っている。

「この子が悪いのよ。智と幸をもて遊ぶから…」

しかし智浩くんは彼女らを冷たい目で見るだけで、何もいわない。
私でもそんな目で見られたら普通にしていられない。

「……いいよ行こっ」

今までだんまりだった内気そうな子が、2人を連れていこうとする。

「……俺、いったよな。キミの気持ちは嬉しいけど、こういうことだけはしないでくれって」

「…っ、ごめんなさいっ」

女の子は目を涙を浮かばせて、生徒指導室を出ていった。残りの2人も私を睨み、それに続いた。

女同士だから殴り合いとか暴力沙汰にはならなかっただろうけど、とにかく最悪の事態を免れてよかった。
私は知らず知らずのうちに力をいれていた体の緊張をとくことができた。

「恵…大丈夫か？」

でも今はちょっとだけ智浩くんの優しさが、苦しかった。

# 第２３話

「……」

私は声を出すことができない。なんでかわからないけど、なんというか言葉が見つからないというか…。

女の子達が教室を出てから数分がたったけど、私達の間には会話はなくいつもより長く感じる時間だけが過ぎていく。

私はずっと床を見ていたけど、ふと顔を上げたら智浩くんと目が合ってしまった。すぐに反らせばいいのに、そうすることができない。

「……久しぶりにちゃんと顔を見た気がする」

智浩くんは苦笑した。初めて見る表情かもしれない。

「……そうだね」

私もちょっとだけ頬が緩む。

「幸に怒られた……っていうかキレられた。恵を困らせるようなことするなって」

幸くん知っちゃったんだ、昨日の出来事。私は自分のことでいっぱいいっぱいだったのに、幸くんは心配してくれたんだよね…。

「勝手だってわかってたけど、本当に自分勝手だったな…」

ポツリポツリと話す智浩くんの表情は少しだけ暗い。

「一番迷惑をかけたくない恵本人に迷惑かけた」

ごめん、と頭を下げる。

「今更ズルいって思ったけど、幸と帰る姿とか見てたら、いてもたってもいられなくなって」

智浩くんの切な告白に、私の胸も締め付けられたように苦しくなる。私は智浩くんがそう思っていてくれたも、見ていたことも知らなかった。

「俺、知り合って間もない人を付き合うなんてあり得ないっていったよな」

「…うん」

「幸は付き合っていくうちにお互いを知ろうとするタイプで、俺はその反対なんだ」

顔や好みは似ててもも2人の付き合い方は決定的に違っていた。もちろん2人がそうであるとはよく知らずに、ただ智浩くんからの一言に傷つき…そして楽な方を選んでしまった。

「俺はもっとお互いを知ってから付き合いたかった。口数の少なさが災いしたんだな…」

智浩くんは私の頭をぽんぽんと叩くと、教室の入口を開けた。

「…そういう事だ。俺の話は終わり」

私にいってるように聞こえなくて…、
入口をみたらそこには複雑な表情をした幸くんがいた。
「あとはお前に任せるよ」
智浩くんは手をヒラヒラやりながら教室を出ていった。
「…あいついいとこどりじゃん」
私は幸くんと2人きりになってしまった。今日は初めて見る幸くんの姿、もちろん顔もちゃんと見れない。
「朝、心配したよ」
「…ごめんなさい」
「まさか昨日、智が告るなんて思ってもなかったからさ」
やっぱり幸くん、智浩の気持ち知ってたんだ。
「めぐが智のこと引きずってたのも聞いた。でも俺は別に怒ったりやめろとかいわない」
幸くんは教室の真ん中にある椅子に座り、膝の上で手を組んだ。こんな姿にも思わずドキッとしてしまうあたり、私は幸くんの事も好きなんだろう。
気持ちははっきりしているのに、やっぱりこんな仕草にドキドキさせられてしまう。

「…めぐも迷ってるんだろ？」

「……」

「素直にいってくれていいよ。ゆかりちゃんの話でなんとなく智のこと引きずってたのも、それでも俺を好きになろうとしてくれてたこともわかってるからさ」

ゆかりちゃんに話を聞くまで気付かなかったのは、ごめんと苦笑した幸くん。

「…2人とも優しすぎるよ。私にはもったいないくらい」

さっきの2人みたいに、私も苦笑い。
本当に、優しすぎる。私なんて幸くんにフラレても仕方ないと思うのに、フルどころか優しくしてくれる。
これじゃ私、ただの欲張りだ…。

「まったく、双子ってのも嫌なもんだよ。特にこういう場合はさ」

それから幸くんは智浩くんとの
「双子で損した話」
を聞かせてくれた。
初恋も同じ相手で、2人で取り合ってるうちにその女の子は他の子と付き合っちゃったんだって。

「智、無愛想だけどその割りに優しいところあるし」

幸くんは智浩くんのそんな所が好きなんだって。ギャップが我が兄ながら可愛いらしい。

「でも好きな子を譲ることも、あいつを貶めるのも出来ないんだ」

幸くんは昔話をして遠回しに私にいってくれた。

『どちらにいくかいかないかは決めて欲しい』

これは迷いそして自分の楽な方へいってしまった私への罰にして、もっとも過酷な試練だった。

## 第２３話（後書き）

久しぶりの更新でした！いつも楽しみにして下さってるみなさま、ありがとうございます。　ここまで読んで下さったみなさまもありがとうございます。

この連載もそろそろ終わりに近づいて来ました。最後はどうするかまだ決めかねてますが、最後まで頑張ろうと思います。

# 第２４話

あの日以来私達の間にはここ最近のぎこちさは消え、以前よりも仲良くなった。

お互いの教室の行き来も以前よりも増して、ゆかりも混ざって４人で寄り道しながら帰ったり休日には遊んだり。

私と幸くんはというと曖昧な関係になってて、智浩くんと三角関係とも言い難くなってしまっていた。私がはっきりしないから、こうなってしまったのはわかってる。

そんな関係も最初のうちはよかったけど、私は2人の誠意をバカにしてるというかけなしているというか、このままではいけないような気がしていた。

「ズルイよね…」

素直に気持ちを打ち明けてくれた二人に、私を好きになってくれた二人に私も素直な気持ちで答えなくては…。

素直な気持ちでと思ってから何日かたったある日。

私は胸にモヤモヤを抱いたままでいた。結論が出ていない、でも早く決めなきゃ二人に悪いという葛藤の中、今日もゆかりと共に7組に向かっていた。

「も～、あんたいつまでウジウジウジウジ……してるのよ！！」

ウジが多いぞ。

「だって…」

「そんなに迷うことなの？もっとシンプルに考えればいいじゃん」

それが出来たらどんなに楽だろう。本日何回目かのため息が出た。

「あれ？7組まだ終わってないや」

いつもなら帰りのＨＲも終ってる時間なんだけど、珍しく教室は全生徒がいた。誰か何かやらかしてお説教でもくらっているのだろうか？

私達は間宮兄弟と約束をしていたので、廊下で待つことにした。

「なんか空気重そうだね…」

「確かに…お説教かな？」

2人で居残りの内容を推理していると、一斉に椅子のガタガタという音がした。

「あっ、終わったみたいだね」

教室から先生が出ていくと、続いて生徒が出ていく。このまま私達が入ろうとするのは無謀だから、生徒の出ていくのが落ち着いてから教室を覗いた。

間宮兄弟は深刻な表情をして自分達の机の所にいた。幸くんは…なんだろう、なんか悲しそうなというか辛そうな顔してる。智浩くんなんて普段の無愛想っぷりはどこへやら、いつも眉間に寄せてる皺

もなかった。

「幸浩くん智浩くん終わった〜？」

私が声をかけようか迷っていると隣でゆかりが先をこした。

全く、この子は2人の事はお構いなしなのだろうか。

「あっ、ゆかりちゃん。ちょっと待ってね」

声に反応した幸くんが慌てて帰り支度をはじめた。智浩くんもそれに従った。

2人してなんであんな深刻な表情してたんだろ？

「2人共お待たせ！」

「いえいえ、なんか今日は終わるの遅かったね」

「色々あってね」

廊下に差し込む陽はすでにオレンジ色をしていた。外からは運動部のかけ声、校舎の外れの方からは吹奏楽の音。

「……この風景とか部活してる声や音って、いつも当たり前に感じてたけど…」

珍しく智浩くんから話題を切り出してきた。

「うん、」

がしかし、私があいずちをうってもその言葉の続きを智浩くんの口

から出ることはなかった。
或いは隣にいた幸くんだけは、その先の言葉を知っていたのかもしれない。
私は何とも言えない胸のざわめきを抱きながら、家に帰っていった。

翌日、私はいつもより早く目が覚めた。カーテンを開けると視界に広がった青い空を雀が飛んでいて、眩しい太陽の光が私を照らした。
なんだか気分がよかったから、私は学校に行く前に散歩に出かけることにした。
この時は気付かなかったけど、いつもより早く目が覚めたのも散歩に行く気になったのも一種の虫の知らせだったんだろう。

スニーカーを履き外へと出ると、この時間にいるはずのない人影があった。
私のよく知ってる後ろ姿。そこには私服で立っている幸くんがいた。

「おはよう」

声をかけるとゆっくり振り向く幸くん。心なしか表情が暗い気がしたのは、私の勘違いかな？

「おはよ、早いね」

「それは幸くんもでしょ？どうしたの？」

「……どこかに行くの？」

「えっ…あ、早く目が覚めちゃっから、散歩にでも行こうと思って」

「じゃあ、俺も付き合うよ」

何でここにいるのかという質問、何だか上手く誤魔化されちゃった。
でも幸くんが暗いのはやっぱり気のせいではないみたい。
私達は特に会話も無いまま、近くの公園へと向かった。

## 第２４話（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございました！
更新が大変遅くなり、楽しみにして下さってるみなさんすみませんでした。

このお話もあと2話くらいで終わりです。次作もぼちぼちと考えはじめてます。
次話もよろしくお願いします！

## 第２５話

普段賑わいを見せる公園の朝は人気はなく、風によって音を立てているブランコが何故か悲しく見える。
いつもは感じない寂しさに、私は何だか嫌な予感がしてならなかった。

相変わらず会話は無いままで、私達はとりあえずベンチに腰を下ろした。そういえば、幸くんと2人きりになるのもすごく久しぶりな気がする。

「2人でこうするの、久しぶりだね」

幸くんも同じ事を考えていたみたいで、ちょっと嬉しい。

「そうだね、最近は4人でいるのがほとんどだったもんね…」

雰囲気にいたたまれなくなって私は足を前に伸ばし、手で爪先を触ろうと上半身を倒した。2人きりになるのが久しぶりと感じるのも元はといえば私のせいだし、今だって確かに幸くんに辛い思いをさせてるはずだ。
ただ私には今の関係を崩す勇気がない。――ただの欲張りだ。

「俺さ、めぐと付き合えて良かったと思ってる」

そんな幸くんの発言に、私は思わず気構えてしまう。

「智も入ってきて今はなんか変な関係だけど、ゆかりちゃんみたいな友達も出来たし」

その話題を振られても、私には今“幸くんか智浩くんどちらかとつきあうか”なんて返事をすることが出来ない。

「2人でいるのももちろん楽しかったけど、4人でいる時も楽しかったのも本当」

「……」

「めぐとはもっと一緒にいたかったけど…」

「……？」

それにしても幸くんの発言がおかしい。私に返事を求めて結論を求めた訳でもないみたいだし、どこか諦めたような…そんな感じがする。

「…あっ、ごめん今のはただの独り言」

「……幸くん、どうかした？」

「何でもないよ、ただそう思っただけ」

そんなことをいう幸くんの表情を見ようとするけど、朝日が逆光になってて見ることが出来ない。

すると幸くんは立ち上がり、一歩前へ出ると私の方へ振り向いた。

「じゃあね！」

一言言い残し幸くんは公園を出ていった。私はその背中を見る事しか出来ず、いつも目を覚ます時間までベンチに座っていた。

朝が早いと自然と学校に行く準備も早くなり、いつもに比べて早くに登校した。今朝の幸くんの発言は謎だったけど、また聞けばいいかと安易に考えていた。
時間が経つにつれ、ざわめきだす教室。私は前の席に座っているクラスメイトと話していた。隣のゆかりはまだ来ていない。

「あっ、そういえばめぐ。今日学校に来たの早いけど、見送りはいいの？」

クラスメイトが話を振ってきた。

「…見送り？誰の？」

「間宮兄弟のよ」

幸くんと智浩くんの見送り？私にはどういうことかわからない。

「恵〜っ！」

首を傾げていたら、ゆかりが登校してきた。走って来たらしく、肩で息をしている。

「ゆかり、おはよう」

「呑気に挨拶してる場合じゃないよ！幸くん達、今日転校するんだって」

今朝の幸くんの様子といい、私の早起きといい、なんかあるなとは思ってたけど……。

「ちょっと待って、それ本当？」

「えっ、あんた知らなかったの？」

「そんな嘘つくわけないでしょ？」

２人の表情からみて、どうやら嘘ではないみたい。

「なんかお父さんの都合で、いきなりの転校なんだって！もうこっちには戻ってこないみたいだよ」

気がつくと私は走り出していた。教室を飛び出す瞬間後ろのほうで、「あと３０分後に出る電車に乗るって！！」

というゆかりの声がしたから行き先は駅。始業のチャイムが鳴ったような気がするけど、そんなのは構ってられない。

無我夢中で走った。

今朝の話は彼なりの別れの挨拶だったのだろうか？先日帰りのＨＲが遅かったのも、クラスメイトに別れを告げてたのだろう…。何で気がつかなかったんだろうと走りながら後悔しても遅い。今ただ出発に間に合う事だけを願っていた。

「はぁ…はぁ…」

汗だくになりながら駅のホームへ着いた。周りをキョロキョロ見回すけど、２人らしき姿は見えない。

「…もしかしてもう行っちゃったのかな」

私はまだ2人にきちんとけじめをつけてないのに、このままお別れなんて嫌だ。
なのに無情にも発車を告げるアナウンスが鳴り、電車のドアが閉まった。
そしてゆっくりと走り出す電車、私はただ立ち尽くし見ている事しか出来ない。
するとポッケに入れてた携帯が震えた、メールが来ていた。

『ｆｒｏｍ　間宮幸浩

最後の車両の一番後ろのドア』

とっさに車両を見ると偶然にも最後の車両が通過している時で、窓際に立っている2人が見えた。
私は思わず追いかけようとするが走り出す電車にかなうわけもなく、2人の表情を見ることしかできない。
2人はニヤリと笑い携帯を指さすと手を振った。
電車は勢いを増しあっというまにいってしまった。

携帯を確認すると、メールが2件来ていた。

『ｆｒｏｍ　間宮幸浩

また今度会おうね。また会うときに、返事を聞かせて』

1件目は幸くんだ。さりげなく返事の約束をされてしまった。
幸くんのメールの次には登録されていないアドレスからのメールも入っていた。

『ｆｒｏｍ　???
じゃあな』

無愛想というか、何にも飾らない言葉…間違いない、智浩くんだ。
初めてのメールが一言なんて智浩くんらしいというか、せめて何か言葉をいれようと思わなかったのか？
だけどかえってその方がよかったかもしれない。
寂しさが半減された気がするから…。

『次に会うときは必ず、返事をするから！絶対に会いに来てね！』

2人にメールを送った。
すぐに返信されたメール。

『『もちろん、アイツより先に会いに行く』』

まったく同じ内容に、私は笑ってしまう。
私は伸びをすると、また駆け足で学校に戻っていった。

あれから何度目かの春、私は高校を卒業して大学生になろうとしていた。
相変わらずゆかりとは仲良くやってて、大学の学部まで一緒。

今日は晴天だしいい風も吹いていて気持ちがいい。
大学の桜の木の下で花弁の隙間から覗く空を仰いでいると、
誰かが傍にきた。
誰が来たのか雰囲着でわかる、彼だ。

「久しぶり」

やっと会うことができた。
私はずっと心の中で暖めてきた言葉を口にした。

## 第２５話（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございました！無愛想な彼、これで終わりです。

なんだかひねりない終わりでしたが、最後はどちらと結ばれてもいいようになってます。ここだけの話、最後の最後まで幸浩か智浩どちらとくっつこうか迷った挙句の結末がこれです（汗）最後があっけなさ過ぎてしまったのは、私の力不足ですね…。
でもとりあえず一作書き終えることができましたので、次作はもっといい話がかけからと思います。

『無愛想な彼』読んで下さった皆様、楽しみにして下さった皆様、感想を下さった皆様ありがとうございました！
感想なといただけると嬉しいです。また次回作でお会いしましょう☆

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5456a/

無愛想な彼

2010年10月28日03時39分発行